

兎「此は澤山ぬらないとだめなんですよ。もつとぬつて上げませう。」

狸「もつとですか。痛いなあ〜」

兎「よいしょ〜、もつと〜ぬりますよ。」

狸「あつ……此はたまらない、もう澤山ですよ。」

(逃げ込む)

兎「や〜い〜」

第五場 舟

背景 濱邊

登場人形 狸、兎

幕あく

舞臺前面に波が出て岸り右の方が一寸濱邊になつてゐる。濱邊には兎が木と泥の舟を作つてゐる様子。舟は下に持つ所が着いてゐて其を下から動かさず仕掛になつてゐる。

兎「あゝ漸く出来たな、早く狸が来るといいな。」

狸「兎さん今日は、面白さうだね。何を作つてゐるの。」

兎「あゝ狸さん、今日はね狸さんと舟遊びをしようと思つて今朝から一生懸命に作つてゐたんだよ。丁度いゝ所だ。やつと

出来たから乗らないかい。」

狸「え、乗つてもいゝの？ 嬉しいなあ。」

兎「ちや僕は此の舟に乗るよ。(木の舟に乗る) 狸さんは其方の舟にお乗りよ。」

狸「うん、此かい、いゝお舟だねえ。」(泥の舟に乗る。兎狸、波の上に出る。)

兎「向ふの島までどつちが早いか競争しようよ。」

狸「よし」

(二人 ギッチラコ〜 狸の舟は泥の舟、兎の舟は木の舟、ギッチラコ〜 歌ふ)

狸「兎さん、何だか此の舟沈んでゆくみたいだよ。」

兎「そんな事ないよ。僕が一生懸命作つたんだもの。さあ急がう。」

(二人、ギッチラコ〜)

狸「あつ、水が入つて来た。あつ、舟が沈む。兎さん助けて〜。」

春を待つ

春を待つ子供達の心は、昔も今も變らな

兎「あは……狸さん、君はおぢいさんの畑のものを食べたり、おばあさんをひどい目に會はせたりしたね、今日は思ひきり苦めて仇を討つてやつたんだよ。」

(その間狸は云つてゐる)

狸「兎さんごめんさい、僕もうこれから決して悪い事をしませんがどうぞ助けて……アツ〜」

兎「本當にしないね。それなら此に掘つて僕の舟にお乗りよ。」(狸權に掘つて舟に乗る)

狸「あゝ良かった。兎さん本當にごめんさいね。僕ね此からおぢいさん家に謝りに行くよ。一緒に行つて呉れる？」

兎「あゝ、それちや一緒に行かう。此からは皆で仲よくしようね。ちや早く歸らう。あ、よかつた。」

(二人ギッチラコ〜 元の濱邊に戻る中に幕)

(筆者 附屬幼稚園保母)

志村貞子

い。荒鷲として羽搏く日の夢は昔の子供達

より一層切實に持つてゐようと。否、その夢を實現すべく「大きくなること」が一層嬉しく、一層待たれるのであらう。決戦下、お正月らしい御馳走はなくとも、お正月らしい物はなくとも、「大きくなること」に喜びを感じ、誇を感じる彼等の心は明るく大らかである。決戦下のお正月を迎へるが故に、一層さうである。この伸びゆく明るい、元氣に溢れる子供達のある限り、日本のお正月は常に輝かしい。一年は一年と年毎に新しい大きな希望に充ちてゐる。「今の若い者」と提督の待み仰せられたその幾多の立派な若い者に續くべく、更に更に若い者が「大きくなる春」を待つてゐる。何といふ力強い、嬉しいことであらう。そして何といふ有難いことであらう。

× × ×
朝毎に厳しくなる寒氣にもめげず、子供達はその元氣な赤い頬を一層赤くして「お早う」と駆け込んでくる。その元氣さは、椽房の部屋に迎へられたその昔の子供達に比べて一しほ遅ましい。お辨當の御飯の冷たさが齒にしみ、身體にしみるやうになつてきた。そしてそのお菜も何年前の子供

達程恵まれてはゐない。けれどもお辨當を皆でいたゞく愉しさは相變らずである。この子供達と共にゐて、火のない部屋を寒くどさせ、物の乏しさを歎く大人があるどすればこの子供達の明るさ、遅しさに慚ぢなければならぬ。子供達は誤つた同情心を喜びはしない。お餅の少ないことを云々する前に、お餅を祝へる有難さを感謝しよう。否、お餅がなくとも、何がなくとも、生けるしるしある大御代に、日本人の一人として新たな齡を重ねることに何より大きな喜びがある。それはそのまゝ子供達の春を迎へる素直なよろこびの心に通じる。冬にゐて春を待つてゐる。

× × ×
「お正月が來ると風をあげたり双六したり」の歌の詞のやうに、「お正月には何をして遊ぶの？」ときいてみると、風あげ、双六、羽根つき、かるたどり、と子供達はいつものながら愉しいお正月の遊びを心にゑがいてゐる。或る一日、お正月を待つての話あひから、皆で遊ぶかるたを皆で、双六を皆で作らませう、といふことになつた。

かるたは、古いかるたの、拵へは丈夫な

から讀み札の言葉がふさはしくないと思はれるのでこれまで藏つてあつたのをとり出して、古い畫用紙の白い裏などを貼つてこゝに字を書き繪を描く事にした。詞は皆で相談して決まつたのから一人づゝ受持つて繪を描いたり、字を入れたりしてゐる。イッモニコニコゲンキナコ。ロペノキヤウダイナカヨシヨシ。ハツバガヒカル。ニッポンハツヨイ。かうして子供達の新しいかるたが一枚一枚生れてくる。そして知らず／＼文字への興味も生れてくる。

又、こちらの一隅では、ポスターを、或は包紙を臺紙にして、乗物づくしの、花づくしの、動物づくしの、また飛行機づくしの双六の繪が一枚一枚出來上つては貼り込まれてゆく。やがて皆でかるたをよみあげ、さいころを振る日をたのしみながら。「あといくつねるとお正月」子供達と共に春を待つこの部屋は明るくたのしい。

(筆者 附屬幼稚園保母)